

Title	ネットワーク社会における企業財務-情報通信技術の進歩の観点からの企業財務に関する考察-
Sub Title	
Author	加藤隆尚(Katou, Takahisa) 太田康信
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1993
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1993年度経営学 第987号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001993-0987

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名	加藤 隆尚	主査	太田 康信
	(エーザイ株式会社)	副査	青井 倫一
			國領 二郎
所属	太田 康信 研究室		

ネットワーク社会における企業財務 —情報通信技術の進歩の観点からの企業財務に関する考察—

近年、経営の分野でネットワークという単語がさかんに使用されているが、その使われ方は、人によってまちまちである。本論文は、ネットワークに対する投資、およびそれにとまなうリターンといった、ネットワークの収益性に着目し、論文を展開していく。

ネットワークの収益性を問題にするため、情報通信に関するネットワークを研究の対象として議論を進める。ネットワークの収益性を検討するに当たり、まず情報とネットワークの経済学的な意味を検討する。そのさい、特に問題となるのは、ネットワークの外部経済効果である。ネットワークに外部経済効果があるため、ネットワークには参加者が増えるにしたがって、ネットワークの効率が上がってくるという性質があるということだ。そして、同じ種類のネットワークは、理論上存在しなくなるのである。その結果、ネットワークをうまく構築し、ネットワークの参加者をうまく囲い込めば、ネットワークで扱う財で、独占市場をつくることができる。

理論と実際を比較するために、花王の情報通信ネットワークを研究の対象として取り上げ、とくにその収益性を検討する。その結果、花王の売上高は、1985年との比較で約1.65倍に達していることがわかった。一方同じ頃、同社のライバルと目されるライオンは売上規模が1.05倍にしか達していない。シェアの点で両社の差がついたといえる。利益面でも花王は、1985年の約2倍、総資産でも約2倍、資産による現在価値の増加が約3000億と算出された。

以上のことから、ネットワークにはその構築に成功すれば、市場を支配できるような強いパワーを持っている経営的に重要なツールであるといえる。

反面、初期投資やメンテナンスに多額の投資を必要としており、資金の調達力が問題になる。